

留学生の引率補助を通じた言語交流研修

—学習者の動向把握と日本語教員としての適性認識を中心に—

片桐 史尚

キーワード：引率補助，学習者の動向把握，日本語教師としての適性認識，言語交流の機会創出

はじめに

平成14年度通年開設科目「日本語教授法演習Ⅰ」（国内日本語教育実習を含む・四年次対象科目）では、従来の指導項目である「教育実習事前指導」「教育実習事後指導」「日本語能力試験対策指導」「明海祭における日本語学校生案内」「日本語学校生の会話指導」の他に、明海大学特別聴講学生（台湾の東呉大学・銘傳大学・大葉大学、韓国の同徳女子大学校・釜山外国語大学校・忠南大学校・オーストラリアのセントラル キーンズランド大学の留学生）を対象とした「日光研修」（一泊）の「引率補助」を新たに指導内容として組み入れ外国人学習者の動向把握、日本語教員としての適性認識を目標とした試みがなされた。

上記に示した指導内容は、①教育実習指導に関するもの、②外国人学習者とのコミュニケーション活動に関するもの、この二項目に大別される。このうち②の項目では明海祭に日本語学校生を招き大学内を案内させる、日本語教育機関に学生を派遣し外国人学習者の会話の相手をさせるなど異文化理解と円滑なコミュニケーションの方法を探らせるというものである。このような外国人学習者とのコミュニケーションの機会を与える必要は筆者が以前から感じてきたことであり、「日光研修」もその一環として捉えシラバスに組み込んだのである。それは筆者自身が教室外における外国人留学生の一端に触れることで、彼らの語彙、文法、ニーズのほか、生活状況、会話内容、不満など学習者の生活形態全般を把握でき、日本語教育や学生指導に非常に有効であったからに他ならない。より具体的に言えば、例文提出時に留学生の会話内容に類似した場面設定をすることで彼らの意味理解を助けたり、危惧される生活指導上の問題を「予防的」に解決することが可能になったことが挙げられる。日本というホームグラウンドで教える日本語教員は「日本語を教えるだけ」「自分の教養のため」というスタンスだけでは成り立つものではなく、「留学生の隣人」としての機能も期待されているのである。しかしこれを敢えて無視する旧来の動きも存在しているのは事実であるが、今後より一層厳格になるであろう学生の教員評価などの影響を受け、徐々に状況は変わっていくものと思われる。

この小論ではこのような現実に対し、研修を通じた学習者の動向把握と日本語教員としての適性認識の指導について論じていく。

1. 「日本語教授法演習 I」の新・旧シラバス

平成13年度より「日本語教授法演習 I」（国内日本語教育実習を含む）は開設され、それまでの中国・台湾・韓国・オーストラリアなどの海外日本語教育実習機関以外に新たに国内の実習先を加え、8名の学生がKCPインターナショナル語学研修院（新宿）で実習を行った。（詳細については、拙稿「日本語教育実習生の背景と意識変化」を参考にされたい。「明海日本語」第6号）

平成14年度については幾つかの反省点から、実習の前後により多くの外国人学習者との交流を持たせるべく新シラバスの作成を行い、また新たに千駄ヶ谷日本語教育研修所にも実習指導を依頼した。尚、平成14年度は7名の学生が以下の新シラバスのもと実習に参加した。（韓国人学部留学生2名を含む）

※新シラバスの■は新たに加えた指導項目

■新シラバス

- 第 1回 オリエンテーション
- 第 2回 ■日本語教育機関見学① 学習者との交流
- 第 3回 ■日本語教育機関見学② 学習者との交流
- 第 4回 日本語文法項目確認①
- 第 5回 日本語文法項目確認②
- 第 6回 教案作成① ※現役日本語教員による指導
- 第 7回 教案作成② ※現役日本語教員による指導
- 第 8回 ■実習（第1週目）
- 第 9回 ■実習（第2週目）

・6月 KCPインターナショナル語学研修院（新宿）

・9月 KCPインターナショナル語学研修院

※実習が9月にも行われるのは国語教育実習（6月）に参加する学生に配慮したため。

- 第10回 実習後の反省会
- 第11回 日本語能力試験指導①②
明海祭で学生を案内
スピーチコンテスト参観
- 第12回 日本語能力試験指導③④

※普通、日本語教育機関での実習は初級クラスで行われるため、中・上級クラスの外国人学生とのコミュニケーションの機会は限られ、教室運営経験もなされていない現状である。そこで特別聴講学生を対象に「日本語能力試験1・2級」の対策講座を担当させている。

■旧シラバス

- オリエンテーション
- 日本語教育機関事情①
- 日本語教育機関事情②
- 外国人学習者事情①
- 外国人学習者事情②
- 担当教員による教案指導①
- 担当教員による教案指導①
- 実習（第1週目）
- 実習（第2週目）

KCPインターナショナル語学研修院

千駄ヶ谷日本語教育研究所（落合）

- 実習後の反省会
- 日本語能力試験指導①②
明海祭で学生を案内
スピーチコンテスト参観
- 日本語能力試験指導③④

第13回	日本語学校生への会話指導	特別聴講学生との交流会
第14回	日光研修引率補助	レポート提出指導
第15回	日光研修引率補助	まとめ・発表

※一泊二日研修のため14・15回を充てた。

2. 日光研修

日光研修は特別聴講学生対象科目「日本事情」の一環として始められたものであるが、ここ数年は留学当初のオリエンテーション的色彩、また留学修了を控えた卒業研修の意味合いを持たせたものになっていたが、この研修に「日本語教授法演習Ⅰ」の日本語教員志望学生を参加させ、外国人学習者とのコミュニケーション方法や授業以外の引率教員や学習者の動向を把握させる機会とも捉え「引率補助」という役割を設け参加させた。さらに日光研修に先立つ引率教員による詳細なオリエンテーションにも参加させ、授業以外の外国人留学生指導の一端を把握させる試みがなされた。

以下は行程を速やかにこなすための役割分担である。この構成によって、特別聴講学生と引率補助の日本語教員志望者の連帯を期待した。

■特別聴講学生	53名（今回は三カ国の学生により構成された）
引率補助学生	7名
引率教員	3名

■引率学生とのメンバー構成

○引率教員X

東呉大学15期生（18名）

リーダー	A
学部・案内学生	B
学部・案内学生	C

銘傳大学8期生（9名）

リーダー	A
学部・案内学生	B

○引率教員Y

大葉大学1期生（9名）

リーダー	A
学部・案内学生	B

釜山外国語大学校 2 期生 (7名) CQU (1名)

リーダー A

学部・案内学生 B

学部・案内学生 C

忠南大学校 1 期生 (9名)

リーダー A

学部・案内学生 B

◎統括教員Z

2. 1 期待される引率補助指導～学習者の動向把握

引率補助学生には幾つかの注意事項を与え、引率からさまざまな経験が学べるよう外国人学生対象のオリエンテーションとは別の指導も行った。以下はその具体的内容である。

※内容によっては異文化事情を反映させるものとなっている。

引率指導の目的 留学生について、その動向に留意して学ぶ。

- ① さまざまな機会を捉え、積極的に話し掛けること。
- ② 学生の話す内容に留意すること。(彼らの話題、生活を知り、その内容を授業時の説明、例文作成にすぐ生かすこと。自分の経験、近い体験で説明されると「分かり易い」と評価される。)
注意／特定の学生だけとの「交友関係」にならないよう気を配ること。
- ③ 無言のときでも表情豊かにすること。(表情がなかったりきつかったりすると学生が話し掛けてこない。近寄りがたい印象を与え留学生の会話意欲をそぐことになる。)
- ④ 留学生が少々冷たい対応をしてもひるまないこと。寛容さが必要。これが出来ないと引率するレベルにはならない。
- ⑤ 引率教員の動向に注意し、率先して補助すること。引率教員が何かを始めたらずぐそれを補助すること。
- ⑥ 引率中「なんだ大丈夫だ」「私たちと同じだ」とは思わないこと。思った瞬間、次の段階で齟齬が生じる。また差が分からなくなる。同じだと思った場合は「これは偶然」くらいに思うことが国際交流では必要。
- ⑦ 路面凍結、雪道に不慣れな学生が多いので歩行時は注意すること。(冬季の日光事情) また写真撮影を所構わずし集団から遅れる学生がいるので全体、個々をよく見ること。
- ⑧ 「留学生生活の最高の思い出作り」に関わるという姿勢で接すること。

宿泊場所で とかく問題発生が懸念される場所でもあるので注意が必要。

- ① 備品のうち持ち出せるのは小さなタオルと歯ブラシセットだけであることを徹底させる。特に浴衣、バスタオルなどに注意。（サービス品ではない。）
- ② 露天風呂などは足元が凍結しており滑ると骨折の危険もあるので注意させる。

尚、コミュニケーションを重視した研修であるため、毎回往復とも電車利用としている。

2. 2 研修日程

第1日 東武浅草駅集合 9:30
 ▼東武浅草発 10:20
 ▲東武日光着 12:26
 ◎輪王寺・東照宮・二荒山神社・大猷院 参観（約2時間半）

予め教員志望学生には見学地の説明を留学生に出来るように指導しているが、以下の問題点から円滑に行えないのが現状である。今後さらに留学生との交流を密にしていく必要を感じる次第である。

- ① 留学生のレベルに見合った語彙の選択が出来ず、会話に支障をきたす。
留学生が日本語を理解できなかった時に、すぐ他の日本語に置き換えられない。
- ② 何らかの理由により留学生と齟齬が生じて、その場を繕うことができない。
明るい雰囲気作りができない。
- ③ 社会人学生の場合、若い留学生に溶け込めずなかなか話し掛けられない。
若い社会人学生に顕著な例であり、年下の「異世代」を前に構えてしまう傾向がある。
- ④ 日頃から無表情のためか愛想笑いもできず、熱が入ると口調が厳しくなってしまう。本人はその自覚なし。
- ⑤ 留学生数に圧倒され、いまひとつ積極的行動ができない。
※この件に関しては留学生側にも問題がある。日頃多数の日本人学生が自分たちに関心持たないと批判するが、留学生が多数派になるとやはり日本人に関心を示さなくなるのである。
- ⑥ 懇意になった留学生との交流に集中し、他の留学生を蔑ろにしてしまう。

▼西参道発 15:30
 ▲宿泊所着 16:20
 ・夕食 18:30
 ・交流会 20:30
 ・消灯 23:00

試行錯誤の日本語教員志望学生であったが、夕食後の交流会では留学生にも余裕が出てきたせいか、さまざまな場面で双方に協調体制がみられる。具体的にはそれぞれの部屋を訪ねし熱く討論したり、また一緒に教員の部屋を訪れるなど、昼の寺社参観時にはあまり見られなかった光景が出現する。通常の国際親善を目的とした二時間程度のパーティーとは異なり、前段階の切磋琢磨が次段階の交流に確実に結びつくのは寝食をともにする研修の醍醐味であり、大学側も交流の発展・継続を意識したさまざまな機会を与えていく必要があるだろう。（交通手段、人数には細心の配慮が必要である。）しかしこのような研修の引率を極度に避ける教員がいるのも事実で、国際的環境を看板に掲げる大学の教員としては著しく不的確、不適切な態度であると考えられる。「企画はするが引率せず、講義はするが教室外での交流はご免被る」という姿勢では困るのである。なにより留学生の人となりを知る絶好の機会であり、ここで得られた交流の成果を講義につなげるという姿勢が必要なのである。

第2日	・朝食	8 : 00
	▼宿泊所発	10 : 00
	▲日光駅到着	13 : 00
	▼日光駅発	14 : 00
	▲浅草駅着	16 : 03

解散

◎戦場ヶ原・光徳牧場・竜頭の滝・中禅寺湖・華厳の滝 見学（約2時間）

第1日目の緊張感もなく、継続した国際交流が行われるようになった。初日は写真撮影などでもとかく出身大学別に固まりがちであったがその枠も崩れ理想的な交流が行われた。ただ問題点として、日本語教員志望者が次第に引率補助という役割から引率される側に回ってしまったことが挙げられる。日本語教員志望者といえども学生であるため仕方のないことかもしれないが、今後は2日目の動向に注意を向け「研修」であることを忘れないよう指導していきたいと考える。

3. さまざまな言語交流の機会創出

他の科目の教育実習でも同じことが言えるが、実習における指導対象である学習者との関わりを持たないまま実習の初日を迎えるスケジュールが「普通」となっている。このため教案指導段階、教案準備段階においては、実習担当教員から聞く学習者情報をもとに教案を練る以外になく、当然のことながら「学習者不在の教案」を作成させているのが現状である。このような状況を改善するために、日本語教員養成を担当する教員はあらゆる機会を捉えて日本語教員志望学生と外国人留学生との交流の場を設定し、指導対象者である外国人留学生の傾向を直に把握させていく必要がある。試みに筆者の担当した「日本語教授法講義Ⅱ」（平成13年度、平成14年度）では多数の外国人日本語教師志望学生の履修があったため急速シラバスを改訂し、講義の中心を言語交流と捉え直した。またこの科目は「日本語教授法演習Ⅰ」と違い二年次を中心に履修させるものであるため、以後の実習時において

有効に作用するものと思われる。

以下はそのシラバスの概略である。

改訂前のシラバス

- ・ 1回～13回 講義形式 日本語教育の基礎事項を学ぶ

改訂後のシラバス

- ・ 1回～7回 講義形式 日本語教育の基礎事項を学ぶ
- ・ 8回～13回 演習形式 日本人、外国人学習者のグループを作り学ぶ

語彙説明の方法演習①～③

アクセント指導方法演習①～②

直説法によるストレス体験（英語と韓国語による）

※学習者のストレスを体験する。

まとめ①～②

この経験から「日本語教授法演習Ⅰ」（国内日本語教育実習を含む。四年次対象科目）では、事前指導の段階から外国人学習者との交流の機会をシラバスに組み込み、実習に備えることとした。またこのような対応が迅速に行えるよう、特別聴講学生、学部留学生、他大学の留学センター、国際センター、日本語教育機関と密なるネットワークの構築をしておく必要がある。

次に示すのは講義と連動した筆者のネットワーク例であり、言語交流の実践である。

- | | | |
|------------------|---|------------------------------|
| A 大学外国人留学生 | → | B 大学主催のスピーチコンテストに出場させる |
| | | B 大学日本語教員志望学生を擬似審査員として学習させる |
| B 大学外国人留学生 | → | A 大学の「日本語教授法演習」で教員志望学生と交流させる |
| C 大学外国人留学生 | → | B 大学の「外国語紹介講座」で講師役を務めさせる |
| A・B 大学の日本語教員志望学生 | → | D 日本語教育機関の「日本語会話」授業に参加させる |
| A・B 大学の日本語教員志望学生 | → | C 大学留学生対象科目の課外授業に参加させる |
| E 日本語教育機関の外国人学生 | → | C 大学祭に招待し日本語教員志望学生と交流させる |

以上のような視点は日本語教育には欠かせないものであり、日頃から日本人、外国人を分け隔てなく教育し、双方の交流を促していかなければならないと考える。ただ問題は、日本語教員志望学生の中に「日本語の知識」には関心を示しても「学習者」には関心を示さない者がいることである。学習者には関心はないが、「知の職場」として日本語教員を志望する者は、今も昔も決して少なくないのである。また教師に多様性が求められるのは当然としても、ひと目で教師としては不適格と認められる者の受講も多く講義の流れに支障を来すことも少なくない。

4. 交流による適性の認識

3. の最後で記した「日本語の知識」だけに関心がある教員志望者のためにも多くの交流の機会を設けて、その動機が不純であること、適性がないことを早めに知らせていく必要がある。そのためにも学習者との言語交流の機会を与えていかなければならず、双方の調整に奔走することは仕方のないことかもしれない。しかしこのような作業が一部の教員に委ねられてしまうのも問題である。今後の理想的な日本語学科の体制維持のためには、学生とのコミュニケーション、学生間のコミュニケーションに全力を傾けていくべきである。

次に、日光研修に参加した学生が教師としての適性をどのように感じたか、また反省事項から得られたものは何かという視点でインタビュー形式により調査したものである。

■外国人留学生との交流で感じたこと

- ・うまく話せなかったので教案を読むだけの教師になってしまうのではと思った。私は日頃から講義で本を読むだけの教師を批判していたが、自分がそのタイプだとわかってショックだった。
- ・自分の批判する教師像を意識しすぎて交流したせいか、すべてがごちなくなってしまう、会話が続かなかった。また相手の国のことを何も知らずがっかりさせてしまった。
- ・自分に自信がなく卑屈になったせいで敬語ばかり使って壁を作ってしまった。留学生はリラックスして話してくれたのに。
- ・留学生の表情が少し曇っただけで落ち込んでしまう自分には教師に不向きだと思った。
- ・留学生に好かれたいばかりに自分を抑えてしまったので、たった半日で疲れてしまった。また自分はマニュアルがないと動けない人間だと自覚した。
- ・友達を選べるが、引率補助という立場上、学習者である留学生は選べないということがわかった。もっと大人にならないとだめだと思った。
- ・真面目にやりすぎて笑顔が消えてしまい、場をしらけさせてしまった。日頃から留学生との交流に積極的でなければならぬと思った。
- ・気がつくとも、自分ばかりが話していた。
- ・友達にいないタイプの留学生がいて、話し掛けるのを躊躇ってしまった。
- ・一人の留学生にばかり話し掛けてしまった。これでは最良をする教師と同じだと思った。

■交流から得られたこと

- ・たった一泊の研修であったが、一人の留学生が一日のうちでさまざまな顔を見せてくれたような気がする。初日の午前中にうまく会話を続けられなかった留学生と夕食時には会話が弾んだり、はじめ笑顔のなかった留学生が数時間後に話し掛けてくれたりと充実した「人間研修」が出来たような気がした。教師にとって必要なのは時間をかけて留学生のことをよく知ることだと思った。
- ・日頃の日本人学生同士の交流とは一味も二味も違ったものだった。また引率の先生方の笑顔によって日本語会話の不得意な学生も緊張せずにいられる雰囲気が素晴らしいと思った。日本語教師

にはムードメーカー的な役割が大切なことがわかった。

- ・今回の引率補助では自分の子供っぽさが出て、初日の夕食までは自分の役割をよく把握できていなかった。また他の引率補助の学生が積極的に留学生に話し掛けている姿を見て、自分は外国語の教師には向いていないのではとも思った。しかし初日の自分とはまったく別の自分が二日目にはいて、自然に引率補助の役割が果たせたように感じる。はじめは泊りがけで行く意味がわからなかったが、交流というものは時間をかけなければならないもので、自分もそれによって変化したことがわかった。
- ・留学生との交流では彼らの日本での生活の話がいろいろ出て参考になった。9月の実習のときは留学生に対する知識がなくただ日本語を教えるだけだったが、今回のような交流の機会を経験していたら、もっといい実習ができたかもしれないと思った。また日本語教師の先生方が留学生と接するのを見てパワーのいる仕事だということがわかった。大学の先生方と長い時間を過ごせたのはいい勉強になった。このような機会をもっとあってもいいのではないかと思う。
- ・引率補助を通して自分が安易に日本語教師に憧れていたことがわかった。良い教え方ができるのは交流を通して学生のことをよく知っているからであり、大学の講義でいい点を取るだけでは留学生にとって迷惑な教師になるのではとも思った。もっとはやくこのような交流をしていたら、自分の大学生生活も充実していたのではと思うと悔やまれる。今はわかっただけましといいきかせている。
- ・日本語教師にはある種の「濃さ」が求められているように感じた。一泊二日であったが中身の濃い研修、留学生との濃い人間関係。留学というのは時間制限があるからそうなるのかもしれない。この研修は最近元気がなく自信喪失気味だった自分に力を出すことを思い出させてくれた。またこの「濃さ」が今の自分にも日本にも足りないところだと思った。

おわりに

「教育対象である学習者を知ってこそよい授業ができる」。このあまりにも当然なことが実は行われないまま「実習」に送り出しているのである。「教案が書けない」という日本語教員志望者は後を絶たない。これは教育対象である外国人学習者との交流経験のなさに起因している場合が多い。

外国人学習者から「あの先生は私たちに関心がない」という批判をしばしば耳にする。これは「学習者不在の教案」をもとに授業を展開しているからに他ならず、教師のいない高度な自習用マルチメディア教材で学んだ方がましだと言われているのに等しい。

「何のために教員がいて、誰のために教えるのか」。このごく当たり前のことが検討されずに教壇に立った場合、外国人学習者からは容赦のない批判を浴び、「クラス変更希望」「教員批判」が堂々で行われる至って健全な場が日本語教育にはある。学期途中の教員更迭、授業ボイコット等々、あらゆる修羅場が繰り返され改善の方向に動いていくのである。

しかしこのように過酷な日本語教育の現場を目指す者は多く、またその実態はあまりにも知られていないため、講義、実習をこなささえすれば「自動的に」教員になれると思っている場合が多い。

今回の小論では「引率補助」という方法を通じて、教育の根幹に関わる「人」を知り、それを重視する姿勢がどれだけ大切かを示したつもりである。この方法を通じて学生が真摯に自分の適性を考え、さまざまな示唆を受けるよう切に願う次第である。

参考文献

高橋順一・中山治・御堂岡潔・渡辺文夫編『異文化へのストラテジー』(1991)川島書店

渡辺文夫『異文化へのストラテジー』(1991)川島書店

井上孝代編著『留学生の発達援助』不適應の実態と対応(1997)多賀出版

三国純子・小山真理「海外の大学生を対象とした短期集中日本文化学習の試み」(2000)『日本語教育』105号

片桐史尚「日本語教員養成科目における言語交流の試み」(2000)『明海日本語』第7号